

## スポーツ研究センター

## I 2020年度 大学評価委員会の評価結果への対応

## 【2020年度大学評価結果総評】（参考）

スポーツ研究センターは、2019年度の大学評価委員会の評価結果への対応、研究活動、年度目標の達成状況、いずれの観点から見ても優れた成果を上げていると評価できる。

すでにほぼ完備した体制を構築しており、研究成果の公表（学術貢献）、アスリートというスポーツ・エリート（アスリート）の育成（国内外への貢献）、公開講座・一般向け指導や講習（社会貢献）、大学ブランド化と外部資金獲得（大学への貢献）、勉強会・セミナー（自己研鑽・自己検証）などにおいて学内外の評価を得てきている。その意味で、本学を代表する組織の一つであると言っても過言ではない。それでもなお問題点の洗い出しと課題の設定（たとえばホームページの充実化など）を継続的に行い、改善・向上をめざす姿勢は高く評価できる。2020年度目標とその達成指標は適切に設定されている。上記東京オリンピック・パラリンピックとそれ以後の時代の本学と国内外とに貢献する貴センターの活躍に期待したい。

## 【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2020年度の本シートにおいて記載した、「ホームページのバージョンアップ」、「研究センターの活動の全般的な向上」について引き続き努めていくこととする。そのうえで、国内外に情報を発信できるよう、個々の研究はもとより、スポーツ研究センターの特徴である横断的な取り組みを活性化していく。

## 【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

スポーツ研究センターの研究活動、年度目標の達成状況、研究成果の公表（学術貢献）、スポーツ・エリート（アスリート）の育成（国内外への貢献）、公開講座・一般向け指導や講習（社会貢献）等において学内外の評価を得、ほぼ完備した体制を構築し、概ね問題はない。強いて課題を挙げるとすると以下の通りである。

2020年度の大学評価委員会の評価結果への対応状況では、「ホームページのバージョンアップ」と「研究センターの全般的な向上」について引き続き努めていくこととする、と記載がある。センターに関心のある学内外の人が求めるとされる所員などの情報を簡易に得られるように website が構成されている点は評価できる。

しかしながら、国内外に情報を発信できるよう、活性化しているとあり、日本語の website の内容が充実しているのに対して、国外向け・英語の website には簡易に説明があるだけである。英語版 website についてももう少し詳しい情報提供が必要だろう。

センターの website の「更新情報」を見ると、年1度の更新頻度である。昨年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、大学全体として大幅に研究教育活動が制約されたとはいえ、学内外のスポーツ関連の研究教育に関心のある人たちに、年度を通じた活動が伝わるようにプロジェクトの紹介や研究会のお知らせなどを提供し、更新頻度が上がることを期待したい。

## II 自己点検・評価

## 1 研究活動

## 【2021年5月時点における点検・評価】

## (1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2020年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

## ①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2020年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

## 【スポーツ研究センター内】

2020年度は、以下6つの研究プロジェクトを実施した。

- ①新型コロナウイルスの感染拡大にともなう東京2020大会の開催に関する東京都民の認知
- ②在校生の大学スポーツに対する認知度ならびに評価が大学への帰属意識醸成に与える影響について
- ③アスリートの主体性を導くコーチの関与
- ④体育会に所属する学生アスリートに対する心理支援 - 学生アスリートの心理社会的スキルの獲得状況に関する検討-
- ⑤低速度レジスタンス運動が血管内皮機能に及ぼす影響

## ⑥一硝酸塩サプリメントの摂取が座位行動に伴う血管内皮機能の変化に及ぼす影響

新型コロナウイルス感染拡大を受け、年度末に開催予定であったプロジェクト報告会は開催できなかったが、各プロジェクトの報告書を作成し、所員間で情報共有を行った。

## 【対外的活動】

\* (講習会)『静岡県スポーツ協会 “アスリートの卵” 育成者資質向上研究会講師 「指導者の役割」』, 2021年1月, 杉本 龍勇

\* (講習会)『静岡県スポーツ協会 “アスリートの卵” 育成者資質向上研究会講師 「育成年代向けトレーニング計画」』, 2021年3月, 杉本 龍勇

\* (講習会)『令和3年度日本スポーツ協会公認コーチ3養成講習会』, 2020年11月1・8日(第1会場)および2021年1月23・24日(第6会場), 日本スポーツ協会(オンライン), 令和2年度 共通科目Ⅲ WEB講習会, 全国大会レベルの競技力向上を目的としたコーチングを行う上で必要な資質能力の研鑽を行った, トップリーグ・実業団等でのコーチングスタッフとして, ブロック及び全国大会レベルのプレーヤー・チームに対して競技力向上を目的としたコーチングを行う者を対象とした. 山田 快

\* (セミナー)『“アスリートの卵” 育成者資質向上研修会』, 2021年2月5日, 静岡県・静岡県スポーツ協会(オンライン), 「成長」を導くコーチの在り方について考える, コーチングで最も重視されているプレーヤーの成長に資する知識や実践に関する情報提供を行い, 参加者とともに今日に求められるコーチの在り方についてディスカッションした, 主に子どもを対象にスポーツ指導を行うコーチを対象とした. 山田 快

\* (セミナー)『グッドコーチングセミナー』, 2021年2月19日, 日本バレーボール協会(オンデマンド), パート1 みんなで楽しもう! 「プレーヤーズセンタード」・パート2 何故怒るのか? 「なぜ倫理に反する行為が起きるか」・パート3 怒らないためには! 「倫理に違反する行為を起こさないために」, バレーボールのコーチングにおける体罰・暴力・ハラスメント撲滅を目的として, それに資する実践を説いた動画資料を作成し, 同協会HPに展開した, 主にバレーボールに参画する者を対象としている. 山田 快

\* (講習会)『第3回チーム ralosso 練習会』, 2020年10月4日, パパステニスクラブ津久井(神奈川県), テーマ「パフォーマンス向上に資する心理的スキル」, 相模原市近郊に在住するテニス愛好家らを対象に先述のテーマについて解説した. 中澤 史

\* (座長)『日本スポーツ心理学会第47回大会ポスター発表』, 2020年11月26日-12月6日, オンライン開催, 日本スポーツ心理学会第47回大会ポスター発表の座長を担当した. 中澤 史

\* (話題提供)『第9回スポーツ心理臨床研究会』, 2021年2月27日, オンライン開催, テーマ「ビーチサッカー日本代表チームへのメンタルサポートの試み」, 第9回スポーツ心理臨床研究会において先述のテーマについて話題提供した. 中澤 史

\* (研修会)『東京都鍼灸師会臨床鍼灸スポーツトレーナー研修会』, 2020年10月11日, 東京都大塚(オンライン併用), 動作からみる運動機能評価の鍼灸治療への展開, スポーツ分野で活動を目指している鍼灸師を対象に, 動作評価方法の実際と具体例を, FMS®を用いながら症例に基づいて解説した, 参加者約50名. 泉 重樹

\* (国際学術シンポジウム)『横浜2020スポーツ学術会議』, 2020年9月9日, オンライン, 「オリンピズムと武道(嘉納思想): 武道と平和思想の融合」 “Olympism and Budo (Kano's Philosophy) : Fusion of the Philosophy of Budo and Peace” においてシンポジストを担当し, “Judo as the thought” という題目で発表した. 永木 耕介

\* (プロジェクト)『発育期のスポーツ活動のあり方に関する研究～アスリート育成モデルの構築～』, 2018年4月～2021年3月, 日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究, 内容: 発育期のスポーツ活動ガイドを作成した. 平野 裕一

\* (シンポジウム)『発育期の子どものスポーツ ～単一種目と早期専門化する功罪～』, 2020年10月29日, 第38回日本神経治療学会学術集会特別企画シンポジウム2 (京王プラザホテル), テーマ:「子どもに偏らないスポーツのチャンス」, 内容:発育期の子どものスポーツにおいて単一種目を実施すること, および早期に専門化することの功罪を解説した. 平野 裕一

\* (セミナー)『2020年度野球指導者講習会』, 2021年1月23日, ライブ配信 (東京都), テーマ:2022野球伝来150周年. 次の100年・150年に向けて, 改めて考える日本の野球, 内容:選手育成について～競技力と人間力の向上に向けて～, および投手の育成についてセミナーの進行役を務めた. 平野 裕一

\* (シンポジウム)『令和2年度スポーツ庁スポーツ経営人材育成・活用推進事業 (実践的スポーツ経営人材育成カリキュラム開発支援)』, 2021年1月29日, オンラインシンポジウム (Zoom ウェビナー), テーマ:東京マラソン:世界6大大会としてのマーケティング・コンセプト, 内容:東京マラソンのマーケティング・コンセプトの理解およびビジネスモデルの課題の特定, 参加者:スポーツ庁と日本スポーツマネジメント学会の告知に興味をもった人々. 吉田 政幸

【**根拠資料**】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・2020年度プロジェクト報告

②対外的に発表した研究成果 (出版物、学会発表等)

※2020年度に研究所 (センター) として刊行した出版物 (発刊日、タイトル、著者、内容等) や実施した学会発表等 (学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等) の詳細を記入。

\* (論文)『Covid-19 禍の法学部スポーツ総合演習におけるオンライン授業に関するアンケート結果』, 伊藤マモル, 大西 朋, 草山太一, 三好英次, 2021年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要, 39, P. 21-P. 33.

\* (論文)『大学野球選手のヘモグロビンの濃度』, 伊藤マモル, 杉本恵子, 吉川恵美, 森嶋琢真, 2021年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要, 39, P. 35-P. 40.

\* (出版物)『アスリートのメンタルは強いのか?—スポーツ心理学の最先端から考える—』, 荒井弘和, 2020年4月, 晶文社

\* (出版物)『セルフコントロール能力を高めるメンタルトレーニング』, 荒井弘和, 2020年4月, 大学スポーツ協会編 UNIVAS STYLE —大学でスポーツするあなたへ— P. 12- P. 13.

\* (論文)『新型コロナウイルス感染症と氷上アスリート』, 荒井弘和・鈴木世奈・友野一希・竹内洋輔, 2020年12月, 氷上スポーツ研究, 2, P. 13- P. 14.

\* (論文)『アントラージュの多様性がアスリートセンタードを導く』, 荒井弘和, 2020年10月, 体育の科学, 70, P. 743- P. 747.

\* (論文)『トップアスリートに求められる心理的能力を評価する心理検査の開発』, 立谷泰久・村上貴聡・荒井弘和・宇土昌志・平木貴子, 2020年10月, Journal of High Performance Sport, 6, P. 44- P. 61.

\* (論文)『新型コロナウイルスの感染拡大とアスリートセンタード』, 2020年8月, 荒井弘和・宅香菜子, 体育の科学, 70, P. 593- P. 597.

\* (論文)『Impact of COVID-19 on athletes and coaches, and their values in Japan: Repercussions of postponing the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games』, Taku, K. & Arai, H., 2020年6月, Journal of Loss and Trauma, 25, P. 623- P. 630.

\* (論文)『大学生競技者を対象とした日本スポーツ協会の「フェアプレイで日本を元気に」キャンペーンに関する実

態調査』, 荒井弘和・榎本恭介・鈴木郁弥・青野博, 2020年4月, スポーツ産業学研究, 30, P.215- P.221.

\* (学会発表)『大学生アスリートにおけるかぜ症候群への対処行動』, 日本スポーツ心理学会 47 回大会, 2020 年 11 月, 荒井弘和・榎本恭介・清水智弘, P.158- P.159.

\* (論文)『大学時代に体育会系であった勤労者は精神的に優れているか?—東京都に位置する総合大学の卒業生を対象として—』, 杉本龍勇, スポーツ産業学研究, Vol. 31, No. 2(2021)

\* (論文)『大学運動部の活躍が在校生の大学への入学満足度を与える影響』, 杉本龍勇, 2021年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要, P.5-P.13.

(コメント) 杉本龍勇

- ・静岡新聞「東京五輪・パラ 再スタート」2020年4月12日
- ・秋田さきがけ新聞「聖火の未来」2020年6月
- ・中日新聞「東京2020への提言」2020年6月
- ・大分合同新聞「聖火の未来」2020年5月
- ・東京新聞「『東京モデル』どこへ」2020年10月8日
- ・朝日新聞「苦境Jクラブ 自治体がアシスト」2020年11月26日
- ・山陰新聞「東京五輪観戦チケットの払戻し対応などについて」2020年11月26日
- ・新潟日報「東京五輪観戦チケットの払戻し対応などについて」2020年11月26日
- ・静岡新聞「東京五輪観戦チケットの払戻し対応などについて」2020年11月27日
- ・岐阜新聞「前東京五輪組織委員会会長の女性蔑視発言について」2021年2月12日
- ・北海道新聞「前東京五輪組織委員会会長の女性蔑視発言について」2021年2月12日
- ・神戸新聞「前東京五輪組織委員会会長の女性蔑視発言について」2021年2月12日
- ・徳島新聞「前東京五輪組織委員会会長の女性蔑視発言について」2021年2月12日
- ・静岡新聞「信頼回復 いか」2021年2月12日
- ・岐阜新聞「聖火リレーについて」2021年4月1日
- ・千葉日報「聖火リレーについて」2021年4月1日
- ・宮崎日日新聞「聖火リレーについて」2021年4月1日
- ・西日本新聞「聖火リレーについて」2021年4月1日
- ・山陰新聞「聖火リレーについて」2021年4月1日
- ・四国新聞「聖火リレーについて」2021年4月1日

(コラム) 杉本龍勇

- ・静岡新聞時評「コロナ危機のスポーツビジネス」2020年4月9日
- ・静岡新聞時評「新たな日常にスポーツを」2020年6月17日
- ・静岡新聞時評「スポーツ選手の政治的行動」2020年
- ・静岡新聞時評「五輪チケット払い戻し」2020年
- ・静岡新聞時評「東京五輪・パラ」

\* (論文)『子ども達の体力向上を支援する効果的な取り組みの探索:教育委員会の活動の実際と学校現場での取り組み』, 山田 稔・林 容市・山田 快・西嶋尚彦・末永祐介・田原康寛, 2020年7月1日, スポーツ産業学研究 P.285-P.296.

\* (学会発表)『運動部活動場面における指導者からのパワーハラスメント—選手の指導者に対する感情に着目して—』, 日本スポーツ心理学会・第47回大会, 2020年11月21日—12月6日, オンライン. 堀本菜美・山田 快

\* (論文)『サッカー指導者がポジションごとに求めるパーソナリティに関する検討—エゴグラムを枠組みとして—』, 松岡悠太・中澤 史, 2020年12月31日, 交流分析研究, 45(2), P.23-P.34.

\* (論文)『競技レベル別にみたサッカー選手のパーソナリティおよび心理的競技的能力に関する検討』, 中澤 史・

松岡悠太・飯村周平, 2021年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要, 39, P.5-P.9.

\* (論文) 『構成的グループエンカウンターを取り入れたスポーツ総合演習が大学新入生のコミュニケーション・スキルに与える影響』, 福井邦宗・中澤 史, 2021年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要, 39, P.31-P.36.

\* (論文) 『女子新体操選手における競技特性不安と心理的競技能力に関する検討—競技レベルに着目して—』, 土屋有羽・中澤 史, 2021年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要, 39, P.57-P.61.

\* (学会発表) 『男子中学生サッカー選手のポジションごとのパーソナリティに関する縦断的検討』, 日本スポーツ心理学会第47回大会, 2020年11月26日-12月6日, オンライン開催, 松岡悠太・中澤 史

\* (学会発表) 『指導者のリーダーシップが部員のライフスキルの獲得に与える影響—高校のサッカー部を対象として—』, 九州スポーツ心理学会第34回大会, 2021年3月6日-14日, オンライン開催, 博田広樹・中澤 史

(出版物) 『健康づくり』, 街勝憲・越智英輔・松岡豊, 2020年4月1日, 公益財団法人健康・体力づくり財団, pp.16-17, “楽しいフィットネスプログラム 乳がんサバイバーのための運動プログラム<理論編>”を担当

(出版物) 『健康づくり』, 街勝憲・越智英輔・松岡豊, 2020年5月1日, 公益財団法人健康・体力づくり財団, pp.16-17, “楽しいフィットネスプログラム 乳がんサバイバーのための運動プログラム<実践編>”を担当

(論文) 『Low Dose of  $\beta$ -Hydroxy- $\beta$ -Methylbutyrate (HMB) Alleviates Muscle Strength Loss and Limited Joint Flexibility following Eccentric Contractions』, Tsuchiya Y, Ueda H, Sugita N, Ochi E., 2020年4月, J Am Coll Nutr, 40(3)pp.211-218.

(論文) 『Data Validation and Verification Using Blockchain in a Clinical Trial for Breast Cancer: Regulatory Sandbox』, Hirano T, Motohashi T, Okumura K, Takajo K, Kuroki T, Ichikawa D, Matsuoka Y, Ochi E., Ueno T., 2020年4月, J Med Internet Res., 22(6):e18938.

(論文) 『Maintenance of endothelial function following acute resistance exercise in females is associated with a tempered blood pressure response』, Morishima T, Padilla J, Tsuchiya Y, Ochi E., 2020年8月, J Appl Physiol (1985), 129(4) pp.792-799.

(論文) 『Muscular endurance and muscle metabolic responses to 8 weeks of omega-3 polyunsaturated fatty acids supplementation』, Morishima T, Tsuchiya Y, Ueda H, Ochi E., 2020年8月, Physiol Rep., 8(16):e14546.

(論文) 『Aging of the immune system and impaired muscle regeneration: A failure of immunomodulation of adult myogenesis』, Tidball JG, Flores I, Welc SS, Wehling-Henricks M, Ochi E., 2020年12月, Exp Gerontol, 145:111200.

(論文) 『Fast-Velocity Eccentric Cycling Exercise Causes Greater Muscle Damage Than Slow Eccentric Cycling』, Ueda H, Tsuchiya Y, Ochi E., 2020年12月, Front Physiol, 11:596640.

(論文) 『Plasma Eicosapentaenoic Acid Is Associated with Muscle Strength and Muscle Damage after Strenuous Exercise』, Ochi E., Yanagimoto K, Tsuchiya Y., 2021年1月, Sports (Basel), 9(1):11.

(論文) 『High-intensity interval training in breast cancer survivors: a systematic review』, Tsuji K, Matsuoka YJ, Ochi E., 2021年2月, BMC Cancer, 21(1):184.

(論文) 『Low Dose of  $\beta$ -Hydroxy- $\beta$ -Methylbutyrate (HMB) Alleviates Muscle Strength Loss and Limited Joint Flexibility following Eccentric Contractions』, Tsuchiya Y, Ueda H, Sugita N, Ochi E., 2020年4月, J Am Coll Nutr, 40(3)pp.211-218.

(論文)『4-week eicosapentaenoic acid-rich fish oil supplementation partially protects muscular damage following eccentric contractions』, Tsuchiya Y, Ueda H, Yanagimoto K, Kato A, Ochi E., 2021年3月, J Int Soc Sports Nutr, 18(1):18.

(学会発表)『Sitting-induced endothelial dysfunction is prevented in endurance-trained individuals』, 67th Annual Meeting of American College of Sports Medicine, 2020年5月26-30日, オンライン, Morishima T, Tsuchiya Y, Ueda H, Tsuji K, Ochi E.

(学会発表)『スマホアプリとFitbitを用いた乳がんサバイバーに対する運動介入』, 緩和・支持・心のケア合同学術大会2020, 2020年8月9-10日, オンライン, 松岡豊, 街勝憲, 成澤知美, 清水陽一, 越智英輔

\* (論文)『アスリートの腰痛に対する鍼治療～機能評価を指標とした鍼治療の例～』, 泉重樹, 2021年3月, 埼玉鍼灸学会誌, 8(1), P.6-P.7.

\* (論文)『力発揮の素早さが異なるレジスタンストレーニングが瞬発的力発揮特性に及ぼす影響』犬走渚, 平野裕一, 泉重樹, 2020年, トレーニング科学, 32(3), P.109-P.117.

\* (論文)『スポーツ選手を対象とした鍼灸治療の有害事象調査』藤本英樹, 近藤宏, 古屋英治, 金子泰久, 泉重樹, 櫻庭陽, 吉田行宏, 鳥海崇, 池宗佐知子, 玉地正則, 吉田成仁, 2020年, 全日本鍼灸学会雑誌, 70(1), P.14-P.25.

\* (論文)『陸上競技選手の肉離れに対する鍼治療の例』泉重樹, 2020年10月14日号, 週刊あはきワールド. ヒューマンワールド. No.685, 2020-10. <https://www.human-world.co.jp/newsitem.php?id=2538>

\* (論文)『ハムストリング肉離れと鍼治療について』泉重樹, 2020年10月7日号, 週刊あはきワールド. ヒューマンワールド. No.684, 2020-10. <https://www.human-world.co.jp/newsitem.php?id=2530>

\* (学会発表)『起床後の経過時間の違いが運動時の筋温と素早い力発揮に及ぼす影響』日本臨床スポーツ医学会・第31回学術大会, 2020年10月, オンライン, 平野祐貴, 瀬戸宏明, 泉重樹

\* (学会発表)『サッカーのトレーナーを対象とした鍼灸治療の有害事象調査』全日本鍼灸学会・第69回大会. 2020年6月(中止.抄録発表のみ), 藤本英樹, 鳥海崇, 金子泰久, 泉重樹, 櫻庭陽, 吉田行宏, 池宗佐知子, 玉地正則, 吉田成仁, 近藤宏, 古屋英治

\* (学会発表)『スポーツにおける鍼灸あん摩マッサージ指圧の有害事象 マラソンランナー対象のアンケート調査』全日本鍼灸学会・第69回大会. 2020年6月(中止.抄録発表のみ), 櫻庭陽, 近藤宏, 池宗佐知子, 泉重樹, 金子泰久, 玉地正則, 鳥海崇, 藤本英樹, 吉田成仁, 吉田行宏, 古屋英治

\* (学会発表)『若年男子サッカー選手における鼠径部痛の既往歴と鼠径部周囲の筋力, 柔軟性, アライメントの関連』スポーツ選手のためのリハビリテーション研究会・第37回研修会, 2020年3月, オンライン, 中一尚斗, 佐藤祐輔, 泉重樹

(学会発表)『居室放送による「体づくりトレーニング」が受刑者の健康・体力に及ぼす影響』, 日本矯正教育学会・第56回大会, 2020年10月7日～11月6日, 大会特設ホームページでのオンライン開催, 高見京太, 古屋 亨

(論文)『発育期のスポーツ活動とアスリート育成モデル』, 平野裕一, 2020年7月1日, 体育の科学, P.493-P.497.

(出版物)『発育期のスポーツ活動のあり方に関する研究～アスリート育成モデルの構築～ ー第3報ー』, 平野裕一ほか, 2021年3月31日, 令和2年度日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告I.

(論文)『スポーツ観戦関与と消費者知識について:精通性に着目して』, 井上尊寛・松岡宏高, スポーツ科学研究,

2020年, スポーツ科学研究, 第17巻, P.62-P.78.

(論文)『スポーツ観戦行動における関与に関する研究』, 井上尊寛・松岡宏高, 2021年1月, 早稲田大学スポーツ科学研究科

(論文)『ファンコミュニティ・アイデンティフィケーション: プロスポーツにおける因子構造, 先行要因, 結果要因の検証』(論文), 吉田政幸・井上尊寛・伊藤真紀, 2021年3月, イノベーション・マネジメント, 18:P.161-P.186.

(論文)『The role of pride feelings in the team and fan community identification processes: An empirical examination in professional sport』(原著論文), Gordon, B.S., Yoshida, M., Nakazawa, M., & Bass, J., 2021年1月, Corporate Reputation Review, 24:76-94.

(学会発表)『エクストリームスポーツイベントにおけるスポンサーフィット: イメージフィットとフィーリングフィットの検証』, 日本スポーツマネジメント学会, 2021年3月, オンライン開催 (Zoom ウェビナー), Kaiyi Zheng・吉田政幸

(出版物)『体育における「言葉による学び」の実現可能性』, 広瀬健一, 2020年9月1日, 大修館書店, P.28-P.31.

(論文)『コーチング場面における言語の有用性の変化についての一考察: 言葉とイメージの関係に着目して』, 広瀬健一, 2020年11月30日, 体育・スポーツ哲学研究42巻2号, P.97-P.107.

(論文)『正規重量と異なる重量の円盤における投てき距離の変化量』, 前田奎・小岩晴樹・広瀬健一・青木和浩, 2020年9月30日, 陸上競技研究122号P.44-P.49.

(論文)『Relationship between competitive and jumping abilities in university track and field athletes』, Kazuhiro Aoki・Kenta Katsumata・Kenichi Hirose・Yoshimitsu Kohmura, 2020年5月30日, Journal of Physical Education and Sport. 20(3) P.1423-P.1429.

(学会発表)『Linguistic communication and violence in coaching practices.』, The 2020 Yokohama Sport Conference, 2020年9月8-22日, Web開催, Kenichi Hirose

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

・『法政大学スポーツ研究センター紀要』(第39号)

### ③研究成果に対する社会的評価 (書評・論文等)

※研究所(センター)がこれまでに発行した刊行物に対して2020年度に書かれた書評(刊行物名、件数等)や2020年度に引用された論文(論文タイトル、件数等)、2020年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。

越智 英輔: 引用件数181件(Google Scholar), 163件(Research Gate)

泉 重樹: 引用件数3件

広瀬 健一: 引用件数1件

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

### ④研究所(センター)に対する外部からの組織評価(第三者評価等)

※2020年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

スポーツ研究センター所員同士での横断的な取り組みをより活性化して、外部に発信できる礎を築いている。その活動について外部評価を得られるよう努めていく。

【**根拠資料**】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

#### ⑤ 科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2020年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び2020年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

\*（採択）『2020年度科学研究費補助金 基盤研究(C)（一般）』～大学生アスリートの価値の明確化を促す心理サポートプログラムの開発～，（研究代表者）荒井弘和

\*（採択）『2021年度科学研究費補助金 基盤研究(C)（一般）』～トップアスリートの心理的能力を向上する新たなメンタルトレーニングプログラムの開発～，（研究分担者）荒井弘和

\*（応募）『2021年度 科研費 若手研究』～アスリートの主体性を導くコーチング指標を創出する～，山田 快

\*（応募）『2021年度 科研費 基礎研究(C)（一般）』～運動部活動による選手の人格形成および心理社会的スキル向上のプロセスの解明～，研究代表者・中澤 史 研究分担者・吉田康伸

\*（応募）『2021年度 科研費 基盤研究(B)（一般）』～運動によるがん関連倦怠感改善に血中脂肪酸バランスが及ぼす影響：ランダム化比較試験～，（分担研究者）越智英輔

\*（採択）『科研費 基盤研究(C)（一般）』～弾性タンパク質コネクチン（タイチン）が伸張性収縮前後の筋・関節機能に及ぼす影響～，（代表研究者：継続）越智英輔

\*（採択）『科研費 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）』～遺伝的要因が伸張性運動前後の筋・関節機能に及ぼす影響～，（代表研究者：継続）越智英輔

\*（採択）『科研費 基盤研究(A)（一般）』～サルコペニアに伴う骨格筋の質的变化：メカニズムと有効な対策～，（分担研究者：継続）越智英輔

\*（採択）『2020年度 科研費 基盤研究(C)（一般）』～心理学的アプローチを生かした運動介入が乳がんサバイバーのがん再発不安に与える影響～，（分担研究者：継続）越智英輔

\*（採択）『2021年度 科研費 基盤研究(C)（一般）』～低負荷スロートレーニングによる血管内皮機能および骨格筋の適応メカニズムの解明～，（分担研究者：新規）越智英輔

\*（応募）『2021年度 科研費 基盤研究(C)（一般）』～オンラインによる高齢者への運動機能評価と運動介入効果の検討～，泉重樹

\*（応募）『2021年度 科研費 挑戦的研究（萌芽）』～引退競走馬のリトレーニングからホースセラピーへ繋ぐ仕組みづくりの検討～，高見京太

\*（採択）『2020～2022年度 科研費 基盤研究(C)（一般）』～隠された？嘉納治五郎の柔道思想ーオリンピックの柔道採用をめぐる戦前と戦後の変化～．永木耕介

\*（応募）『2021年度 科研費 基盤研究 C（一般）』～スポーツイベントにおける社会的影響とスポーツに対する関与の関係について～，井上尊寛



\* (採択)『2020年度～2022年度 科学研究費，基盤研究 (C) (一般)』～スポーツ観戦と持続的ウェルビーイング：先行要因と結果要因の検証～，吉田政幸

\* (採択)『令和2年度日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究』～発育期のスポーツ活動のあり方に関する研究～アスリート育成モデルの構築～，平野裕一

---

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。  
 ・特になし

---

⑥ 研究所（センター）における研究活動等に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

※取り組みの概要を記入。

・実験、測定等の準備については、オンライン会議（ミーティング）を活用することとしている。

---

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。  
 ・特になし

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・研究における所員の協働による包括的な研究テーマを決め、学術研究振興資金に申請した。申請は採択されなかったものの、本研究センターの特徴でも横断的な所員同士による共同研究を今後も促進する。	

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・個々の研究に特化しないようすることも、本研究センターの今後の発展への課題でもある。また、ホームページの運用を増やし、所員の研究活動の情報発信に努めたい。	

**【この基準の大学評価】**

2020年度はコロナ禍という環境下にもかかわらず、スポーツ研究センター内の研究活動については6つの研究プロジェクトを実施するとともに、対外的な講習会やセミナー、スポーツ研究センター紀要だけでなく、英文ジャーナルへの投稿や学会発表を行い、研究活動実績、対外的に発表した研究成果とその社会的評価は良好であるといえる。さらに各所員の科研費等外部資金への積極的な応募があり、採択実績も良好である。これらの点は高く評価できる。また、学術的な発表にとどまらず、新聞を通じて東京五輪に向けたコメントやコラムを複数掲載して、一般の人たちにも視点を提供していることも社会的評価を上げる点で高く評価できる。問題点・課題の項で挙げられているが、これらの活発な活動は残念ながらセンターの website からは把握することは困難であるので、活動の主要なものいくつかを取り上げて学内外に紹介するよう website を活用することが望まれる。また、2020年度は新型コロナウイルスの感染防止が強く求められたが、対面を避けるためのオンライン会議を活用しており、適切な対応・対策をとっているといえる。外部からの組織評価については、センター所員同士での横断的な取り組みをより活発化して、(中略)外部評価を得られるよう努めていく、とある。スポーツ研究センターは様々な研究分野の集合体であり、学際的に活動を行っているた

め、横断的な評価を得ることは難しいという点は理解できるが、もう少し具体的にどのような評価を得ようとするのかについて明示した方が良さだろう。そうした目標設定の過程も考える必要があるのかも含めて考慮した上で、目標を立てることが求められる。(2) 長所・特色において、学部横断的な所員の特徴を生かした共同研究を促進するとあり、今後もこの特色を生かした活動の継続が求められる。

### Ⅲ 2020 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動	
1	中期目標	現在まで、各所員による個別の研究を進めてきた。今後は所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした研究センターとして包括的な研究プロジェクトを起ち上げ、社会問題解決に貢献する研究を促進する。	
	年度目標	昨年は、様々な事情により研究センター内での勉強会やセミナーの開催頻度を上げることができなかった。これを反省し、今年度はこれらの開催頻度を上げ、積極的な意見交換を通じて各所員の研究に役立てる。また、所員同士の研究における連携及び相互作用を創出するよう努める。	
	達成指標	共同プロジェクトの構築により、科研費等の外部資金獲得を目指す。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		本年度は研究センター内の研究プロジェクトとして 7 件の申請があり、活発に研究が行われている。また研究センターとしての包括的なプロジェクトとして、日本私立学校振興・共済事業団の学術研究振興資金に応募しており、共同研究の面でも活性化している。結果としては外部資金の獲得には至らなかったものの、これらの活動により、共同プロジェクトの構築に向けた様々な活動が実施できた。	
改善策	コロナウイルス感染拡大の影響を受け、研究センター内での勉強会やセミナーの頻度を昨年度よりも増やすことが出来なかった。しかし、発表等の機会を増やすことは出来なかったものの、教員同士の連携は盛んに行われていることから、来年度はオンラインを活用した勉強会やセミナーの開催を検討して行く予定である。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
2	中期目標	現在まで継続している公開講座を今後も継続し、地域のスポーツ活動の活性化に努める。また体育会強化を通じて法政スポーツの活性化に努め、学生アスリートの競技力および社会人基礎力の向上を促し、大学のブランド力向上に貢献する。	
	年度目標	SSI のカリキュラムとして、一昨年、昨年と同様に「オリンピック・パラリンピックを考える」が開講される。そこで 2021 年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、競技以外の側面でも社会貢献できるよう教育内容の向上を図る。	
	達成指標	法政スポーツの競技力および社会性の両面における外部からの評価が高まるよう、強化・育成に努める。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		SSI のカリキュラムとして開講された「オリンピック・パラリンピックを考える」に複数の研究員が登壇し、講義を行った。公開講座のため、体育会管轄の部に所属する学生以外の学生にもオリンピック・パラリンピックを含めたスポーツについて啓蒙を行った。コロナ禍の状況下で授業を実施せざるを得なかったため、教育内容の充実度は改善の余地があるが、達成指標は十分に満たしている。	
改善策	コロナウイルス感染拡大の影響受け、公開講座の開講が出来なかった。今後は、対面だけでなく、オンラインを活用した講座の開講も準備し、社会貢献に努めていきたい。		
<p>【重点目標】 研究センター内でセミナーおよび勉強会の開催頻度を増やす。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 新型コロナウイルスの感染者数の状況次第で確定しにくい部分はあるが、各所員の都合にフレキシブルに対応し、オンラインミーティングなどを活用しながら開催する。</p>			

**【年度目標達成状況総括】**

年度目標については、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けたものの、部分的には達成することが出来た。本年度も研究センターの共同プロジェクトとして外部資金の獲得を目指して日本私立学校振興・共済事業団の学術研究振興資金に申請しており、今後も共同研究を更に促進していきたい。また、本学体育会への競技面ならびにキャリア構築の2つの側面に対する共同研究を活性化させ、体育会活動が競技力強化のみに留まらず、人間力の醸成にも機能を果たすことができる様にサポートをしていきたい。またこうしたサポートを通じて体育会の価値向上につながるようにしていきたい、これが大学のブランド価値向上に貢献できるように努めたい。

**【2020年度目標の達成状況に関する大学評価】**

スポーツ研究センターは、2020年度は研究センター内でのセミナー及び勉強会の開催頻度を増やすという重点目標であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けたために頻度を増やすことはできなかった。しかしながら、個々の研究や研究プロジェクトを予定どおり進めることができたことを根拠に、自己評価Aをつけている。これは2020年度の感染拡大防止の対面活動の制約を考えればやむを得ないといえる。ただし、オンライン上での授業や会議の普及状況を考えると、2020年度の後半ではzoomなどのオンライン会議システムを活用して、研究会頻度が2019年度以前と比較して維持することが出来た等、オンラインをどのように活用したのかに関する記述があった方が分かりやすいだろう。

**IV 2021年度中期目標・年度目標**

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	現在まで、各所員による個別の研究を進めてきた。今後は所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした研究センターとして包括的な研究プロジェクトを起ち上げ、社会問題解決に貢献する研究を促進する。
	年度目標	昨年は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により研究センター内での勉強会やセミナーの開催頻度を上げることができなかった。今年度はオンラインを活用しながらの開催頻度を上げ、積極的な意見交換を通じて各所員の研究に役立てる。また、所員同士の研究における連携及び相互作用を創出するよう努める。
	達成指標	共同プロジェクトの構築により、科研費等の外部資金獲得を目指す。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	現在まで継続している公開講座を今後も継続し、地域のスポーツ活動の活性化に努める。また体育会強化を通じて法政スポーツの活性化に努め、学生アスリートの競技力および社会人基礎力の向上を促し、大学のブランド力向上に貢献する。
	年度目標	昨年は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、継続していた公開講座を開講することができなかった。これを受け、オンラインを活用した公開講座の準備を行い、開講できるように努めたい。また新たに専任研究員を採用したことに伴い、更に法政スポーツの強化を促進したい。
	達成指標	法政スポーツの競技力および社会性の両面における外部からの評価が高まるよう、強化・育成に努める。

**【重点目標】**

研究センター内でセミナーおよび勉強会の開催頻度の増加と内容の充実

**【目標を達成するための施策等】**

オンラインミーティングなどを活用し、各所員の都合にフレキシブルに対応しながら開催する。

**【2021年度中期目標・年度目標に関する大学評価】**

スポーツ研究センターは、2021年度は、センター内でのセミナーおよび勉強会の開催頻度の増加と内容充実が重点目標として挙げられており、加えて所員どうしの研究における連携及び相互作用を創出するよう努めるとの目標が立てられている。派手さのない目標ではあるものの、研究センターとして、地道に研究活動を継続していくことはとても重要であるので、これを目標とすること自体は評価できる。ただし、前年度もほぼ同様な目標であったことと、昨年度、研究会の頻度を増やすことが出来なかった事実を踏まえ、これらの目標を具体的にどのように達成するのか、などの形で目標自体を多少改善した方が良いように見えるものもある。単にオンラインの活用を昨年度は出来なかった

けなのでこれを活用すれば達成できそうなのか、あるいは他に問題があり、開催頻度の増加のためにはその解決が必要なのかを明示することが必要であろう。

**【大学評価総評】**

スポーツ研究センターは、2020年度大学評価委員会の評価結果への対応や研究活動、目標の達成状況などの点から見て、良好な成果を上げていると評価できる。2021年度は、2018-2021年度中計の最終年度であり、年度目標や達成指標は継続性も重要であるものの、年度目標や達成指標の中には、2019年度と類似のものが書かれており、これらの具体性をさらに深化させるなどの形で、目標自体を更新した方が良いように見えるものもある。2020年度は、本学で従来取り組まれたことのない新型コロナウイルスの感染拡大防止のための対応を新たにする必要があったので、目標の具体的な深化をはかることは困難であったし、また、既に充実しているスポーツ研究センターの研究活動をさらにどのように改善していくのかを考えることは容易ではないことは承知している。そのような中でも新たに加わったオンライン会議システムなどのツールを活用した研究活動の今後の展開に期待したい。